

東海大学チャレンジセンターの教育とボランティア活動

東海大学現代教養センター チャレンジセンター長 木村 英樹

近年、大学における社会人基礎力や学士力といった汎用的な能力の育成が強く求められるようになった。本学では50名以上の大きなプロジェクト活動「でかちやれ」を学生たちが企画し、実行することを支援するチャレンジセンターを2006年に立ち上げた。ここでは、21件のチャレンジプロジェクトが活動を行い、ボランティアをはじめとする社会活動を展開している。本稿では、本センターの教育プログラムと、活動の事例について紹介する。

1. はじめに

核家族化・少子化の影響や、ゲーム機の普及による遊びの変化などから、現代の若者たちが大人数で行動することは、以前よりも苦手になったといわれている。東海大学では、社会人基礎力や学士力の必要性が叫ばれる前から準備を進め、2006年に社会的実践力を体得させる場として「チャレンジセンター」を設置した。ここでは、社会的実践力を「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の4つの力として定義し、大規模なプロジェクト活動を行う中で育成してきた。活動内容は「ボランティア」「地域活性化」「国際交流」「ものづくり」と様々である。2016年度は、湘南をはじめとして代々木・高輪・清水・伊勢原・熊本・阿蘇・札幌の8つのキャンパスで、21件の大きなチャレンジプロジェクトと、23件の萌芽的なユニークプロジェクトが展開された。2016年度に採択されたチャレンジプロジェクトのうち、湘南キャンパスを中心に組織されたものの一部を示す。

- ① 熊本復興支援プロジェクト（特別）
熊本地震の被災地への支援活動
- ② 病院ボランティアプロジェクト
ベッドサイドケアや院内イベント実施
- ③ スポーツ社会貢献プロジェクト
子どもや高齢者対象のスポーツ教室
- ④ キャンパスストリートプロジェクト
大学周辺における地域活性化
- ⑤ サイエンスコミュニケーター
理科離れ防止の科学教室の実施
- ⑥ 3.11生活復興支援プロジェクト
東日本大震災被災地域でのライフケア

- ⑦ TICC
外国人児童への学習支援や国際交流
- ⑧ ライトパワープロジェクト
ソーラーカー・人力飛行機開発
- ⑨ 学生ロケットプロジェクト
ロケット開発と啓発活動



熊本復興支援プロジェクト

2. チャレンジセンターの活動

プロジェクトは1年毎に学生からの希望を受け付け、申請書類や活動実績などを基に審査が行われ採択される。チャレンジプロジェクトには、50名以上という人数要件があり、集めるのも束ねるのも一筋縄ではいかない数をあえて設定している。緊急性がある場合には、特別プロジェクトとして随時立ち上げることも可能であり、2016年度は「熊本復興支援ボランティア」が発足した。また、学部・学科・学年が複数以上であることを同時に求め、専門分野が異なり多様な考えをもった学生が一堂に集まるようにした。すべてのチャレンジプロジェクトには、教員のアドバイザーと職員のコーディネーターをそれぞれ1名以上配置し、専門的な知識・技術と組織運営などの支援が行われ、活動場所と支援金も支給される。チャレンジプロ

プロジェクトは上限200万円（特別申請により上限1,000万円）の範囲内で査定される。東海大学には年間5,000万円の活動支援金を支給できる体制がある。

「活動を始めたいがどうすれば良いかわからない」、あるいは「始めているがなかなか思うようにならない」といった学生などを主な対象として、「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の入門・演習、さらに「プロジェクト」入門・実践といった科目を開講している。これらの理念は、「ボランティア」「シティズンシップ」「地域理解」「国際理解」の4科目に引き継がれ、2018年より全学必修として開講する計画である。このような科目担当教員らによって、チャレンジプロジェクトの学生リーダーやサブリーダーを対象として、2泊3日のリーダー研修会を行っている。また、コーディネーターを担当する大学職員にも、事務研修会および1泊2日の能力研修会などを開催している。

大学による社会的責任（USR）の立場から、すべてのプロジェクトにおいて、活動の中に社会貢献的な内容を含むことを求めている。2013年度文部科学省地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）の採択を受け、地域活性・貢献活動についても積極的に取り組むよう、学生たちに働きかけた。地域連携推進部署では、地域コーディネーターに副市長経験者を招き、市役所、連合自治会長、商店会長等とのネットワークを構築し、様々な情報交換とともにイベントの共同開催を行っている。たとえばキャンパスストリートプロジェクトでは、東海大学駅前商店会や社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園などと協働して、音食WEEKやクリスマスU-nightを開催した。



大学・地域交流イベント「音食WEEK」

また多文化共生の理念のもとTICCは、外国人児童への学習支援や啓発イベントなどを行い、この活動は公益財団法人ソロプチミスト日本財団に認められ「学生ボランティア賞」を受賞するなどの評価を受けている。現在では、ものづくり系のプロジェクトであっても社会との関わりを持つという意識が学生たちの間に芽生え、工作教室や地域の産業展への出展などの機会が増えている。2016年3月には神奈川県と東海大学の包括連携協定にある「再生可能エネルギーの導入等の促進」の一環として、箱根町と芦ノ湖スカイラインと共催でソーラーカー走行プロジェクトを実施した。



芦ノ湖スカイラインとソーラーカー

これらのプロジェクト活動による教育効果を評価するために、PROGテストによる能力測定を一部の学生に対して行ったところ、チャレンジプロジェクトに参加した学生と、そうでない学生に分けた場合、コンピテンシーについて前者に優位性があるとの結果が得られた。

3. おわりに

高齢化の進行により財政に明るさが見えない中、地域社会における相互扶助を高めることは、限られた有効手段の一つであると考え。とくに大勢の若い世代を抱える大学にあって、社会的実践力を涵養する手段として、社会と関わる活動を支援することは、地域との共存共栄を図る上でも実効性が高いと感じている。大学として利害関係者との調整を行い、学生に対してボランティア活動の意味を理解させ、強制的にならないよう常に留意することが必要である。